〔文献紹介〕

中西慶爾著　巡歴中山道

武蔵路十一宿・上州路七宿・信濃路十五宿・木曾路十一宿・美濃路十六宿・近江路九宿に分けて、街道の歴史地理を探求し、宿場々々にまつわる物語りをまとめたものである。著者はかつて「甲州街道」を巡歴して、街道史を出版（木耳社）したが、その時すでに七十才を越しており、今では八十才に近い。本書はまず彼のエネルギッシュに驚歎せざるを得ない。

著者中西さんは元来中国美術史の研究家で、特に墨跡の研究が深い。そのためか中山道の路傍に、点在する碑文には鋭い観察眼をもって臨んでいる。また貝原益軒の「岐蘇路之記」や太田南畝の「壬(じん)戌(じゅつ)紀行」など多数の古書を引用したり、「木曾路名所図会」の挿図や広重や英泉の「木曾街道六十九次」の絵を借用して、昔の姿を表現したり、さらに多くの写真を加えて、読む人を飽かさせない。

最初の板橋宿から一気呵成に、最後の草津宿まで読んでみると、中山道を旅しているような気がする。しかも単なる紀行文でなく、著者独特の味のある文で書いてあるので面白い。本書の大部分は中山道の道筋を中心に書いてあるが、第二部として「和宮の東嫁行」「天狗党・死の彷徨」「惨たり赤報隊」の説話集が載っている。「あとがき」にもあるように、この第二部にもっと力を入れたかったようであるが、ページ数の関係で割愛したという。

また「あとがき」に「中山道の大部分を歩いたが、今や八十近い老残の身で、長旅はできず、五日か一週間ぐらいして度々帰宅して休養した」とあるが、本書は明治三十年生れの著者が、中山道を踏破し「足で書いた著書」として、歴史地理学を専攻するものの範とすべきであろう。B六版五五二頁　木耳社　二、八〇〇円

（川崎　敏）

〔第一九回大会の報告〕

第一九回大会は去る四月二九日、日本女子大学において開催され、左記の研究発表がありました。発表終了後「都市の歴史地理」に関する共同討議（司会　山崎謹哉　黒崎千晴両君）が行なわれました。夕刻より桜楓会館において懇親会が開催され、参会者多数で盛会裡に終了しました。なお、正午から別室において評議員会、終了後総会が開かれ、前号掲載のような審議が行なわれました。三〇日には悪天候の中を木村東一郎君の案内で青梅付近の巡検が行なわれ、定員一杯の参加者があり、無事終了しました。巡検、共同討議、研究発表の内容は次のとおりです。

巡検報告

四月三〇日は合憎、朝から強い雨が降っていたが、青梅線小作駅前には全国各地からの会員が多数集まり、本会々員で青梅市文化財保護委員の木村東一郎氏のご案内で午前一〇時一〇分、マイクロバスで出発した。集合場所には青梅鉄道が明治二七年開通した時に堀った井戸も残されていた。バスは以前桑園であった所を昭和三五年以降、日本住宅公団が中心となって開発し、工業団地として造成さ